

ベストピア Bestopia

「パリ通信 27号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年三月
第二十七号

< 2014年 3月 >

古賀 順子

アール・ヌヴォー

3月3日雛祭りを過ぎて、パリは一挙に春になりました。ミモザ、水仙、クロッカス、レンギョウ、エニシダなど、フランスの春は黄色で始まります。青空と春の光に誘われて、パリのアール・ヌヴォー建築を巡りました。

フランスのアール・ヌヴォーといえば、パリのメトロを飾ったエクトール・ギマール(1867-1942)でしょう。2号線の終点「ポルト・ドーフィーヌ」駅には、1900年ギマールが設計した入り口がオリジナルのまま残っています。19世紀末ヨーロッパ各地で一挙に開花したアール・ヌヴォー。植物、花、昆虫、動物など、自然界に着想を得た「曲線の美学」としての新しい芸術です。独創性に溢れた多色の装飾は、新しい感覚を日常の生活空間に具体化したい富裕層の嗜好と一致します。パリではフランス革命百周年を記念する1889年の「万博」に世界中から人が集まっていました。新しい時代の到来を告げるエッフェル塔が代表しているように、建築にも最新の建材「鉄」とガラスの装飾が一気に頂点を極めます。新しい独創的な間取り、モザイクや陶器を取り込み、家具や絨毯、壁紙に至るまでトータル芸術として一世を風靡します。

「アール・ヌヴォー」という言葉は、1894年ベルギーで生まれます。ヴィクトール・オルタ(1861-1947)と同世代のアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(1863-1957)の建築を形容する表現として雑誌に登場しました。1893年オルタがブリュッセルの新興住宅地に設計したタッセル邸が、最初のアール・ヌヴォー建築とされています。1895年には、サミュエル・ビング(1838-1905、ハンブルグ生まれのドイツ人で、フランスに帰化。ジークフリードからフランス名サミュエル

に改名。ジャポニズムの紹介者でもある)が、パリに「アール・ヌヴォーの店」(Maison de l'Art nouveau)を開き、アール・ヌヴォーの名称が広く用いられるようになります。オルタに影響を受けたギマールは、1895年からパリ16区に低家賃集合住宅「カステル・ベランジェ」(14, rue Jean de la Fontaine)の設計を開始、彼自身も住んでいました。アール・ヌヴォーはフランス語ですが、発祥はベルギーといえます。

独創性の点では、ジュール・ラヴィロット(1864-1929)がいます。1901年セラミストのアレクサンドル・ビゴー(1862-1927)と共同設計した7区(29, avenue Rapp)の建物は、装飾過多と思えるほどです。ビゴーとは、1904年「セラミック・ホテル」(34, avenue Wagram)も建てています。アール・ヌヴォーにガラスや陶器は欠かせない存在です。その意味で、パリよりもナンシーでアール・ヌヴォーは繁栄します。エミール・ガレやドーム兄弟のガラス工房から、数々のアール・ヌヴォーの傑作が生まれます。オルタは、ニューヨークのティファニーに色ガラスを発注していました。

第一次世界大戦を機に、アール・ヌヴォーは廃れ、幾何学的なアール・デコへと移行します。20年余りの短い命ですが、そこには伝統を破り、反体制を志した若い芸術家たちの感性を見ることができるとは思いませんか。シャルル・ガルニエ(1825-1898)が50歳で建てた新古典主義のパリ・オペラ座、その次世代がアール・ヌヴォー、アール・デコの建築家たちであり、さらにそこからモダニズムへと移っていきます。パリ、ナンシー、ブリュッセル、そしてパリのアール・ヌヴォー広告美術を代表したチェコ人アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)の街プラハ、それぞれの都市で独自の形態を以て開花したアール・ヌヴォーですが、19世紀末から20世紀初頭に生きた若い建築家や芸術家たちに共通した精神性とエネルギーがあります。